



ルーテル学院だより

NO.147
2021.9.1

http://www.luther.ac.jp/
発行 ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20
TEL:0422-31-4611 FAX:0422-33-6405

発行人 石居 基夫

授業探訪 「いのち学」序説



宮本 新 専任講師

〈専門分野〉
キリスト教、組織神学、宣教学
〈主要担当科目〉
教義学概説、宣教学、キリスト教の信仰他

ちを見つめ考えるような機会になると思います。

Q そもそも「いのち学」とはどんな学びなのでしょう？

A これは2000年代に本学に設置された総合人間学の比較的新しい科目です。一昨年創立110年を迎えた本学のはじまりはキリスト教の牧師を養成する神学校でした。現在は社会福祉、そして臨床心理に発展、おもに三つの専門領域を有しています。これらに共通しているのはどの専門性(専門知識/職)も生きた人間の現実に深くかかわっており、その分、自らの専門性に閉じこもらないで広く深い人間理解の確立が求められています。「いのち学序説」ではその基礎を学ぶという意味で生涯教育としても学べるし、またたえず自らの人間としての理解をアップデートしたり再統合するためのスタート地点を見定めるような学びと考えてよいでしょう。

Q 授業はどんな形で進められますか？

A 講義が基本にありますが、目指すべきは一方から双方向、そしてディスカッションやグループワークなど多様な学び方にあります。授業の終わりには講義内容のリフレクションペーパー(ふり返り)を書いたり、毎授業のはじまりにそのリフレクションを分かち合ったりします。こうしてみるとずいぶん多くのことが求められていると感じるかもしれませんが、1000分ある一回の授業について一方的な講義を学生が聞いて終わることなく、学生本人がアクティブに参加して学べるかの工夫にあります。ただし昨年と今年、コロナ禍においてオンラインによる双方向形式で行うので慣れないことも多く、一層の工夫が求められているのは進行形の課題です。

Q 先生が授業で大切にしている視点がありますか？

A 「いのち学」のような総合的な理解が求められる場面で、この授業ではキリスト教の人間理解を軸としています。実際、授業を通して「キリスト教」は巨大な貯蔵庫のようなものだ、と感じることがあります。神学そのものはキリスト教の神や信仰について考えるのですが実はこの神を考えることを通じて探求されているのは人間についてであり、その社会であり、世界についてです。そこで数千年単位で人々が体験し感じてきたことがあります。現代のようにいのちをめぐる問題が家庭から国際社会のレベルまで急速な変化を遂げているところでは、どこかで腰を据えてしっかりと考え抜いていく姿勢や方法を身につけなければならぬと感じています。本学の場合、キリスト教の人間理解で積み重ねてきたものがあり、その線上で新しい課題に向き合い、学生の皆さんといのち理解の探求をしたいと考えています。

Q 授業では何を学ぶことができますか？

A 人間の「いのち」について基礎的なことを広くそして深く学ぶことを目指した授業です。特に現代社会を生きている私たちにとって、いのちをめぐる問いは幅広く複雑なものとしてあらわれてきます。たとえば昨年の授業では「精子のネット取引」や社会問題となった安楽死をめぐる事件、あるいはコロナ禍における命の選別といった生命倫理学の喫緊の課題を考える機会を設けました。しかしこれらは社会的で倫理的な課題であると同時にこれらを超えた次元もまた含まれています。人間とこのいのちの理解は古くからの歴史的な関心であり、哲学的で宗教的な課題でもあるからです。聖書や古典、芸術芸能も取り上げ深く考える機会があるのはそのためです。ですから学生はこの授業でいのちをめぐる基礎的な問題や知識を学ぶ事にもなりますが、学びを通じて、自らのいのちを見つめ考えるような機会になると思います。

Q 授業はどんな形で進められますか？

A 講義が基本にありますが、目指すべきは一方から双方向、そしてディスカッションやグループワークなど多様な学び方にあります。授業の終わりには講義内容のリフレクションペーパー(ふり返り)を書いたり、毎授業のはじまりにそのリフレクションを分かち合ったりします。こうしてみるとずいぶん多くのことが求められていると感じるかもしれませんが、1000分ある一回の授業について一方的な講義を学生が聞いて終わることなく、学生本人がアクティブに参加して学べるかの工夫にあります。ただし昨年と今年、コロナ禍においてオンラインによる双方向形式で行うので慣れないことも多く、一層の工夫が求められているのは進行形の課題です。



実習報告

児童分野 子どもたちのために できること

子ども支援コース3年 小澤 藍子
私は社会福祉士を目指し、特に児童分野の授業を積極的に受けており、児童養護施設で実習を行いました。実習では、家庭的とは何か、ということを知りたいと思いました。

最初に学んだことは、児童養護施設での生活の場は、子どもたちにとって安全で安心できる場所であることです。安全な場所というのは、子どもとしての権利が守られ、その権利を主張できること、帰る場所があることだということを知りました。

子どもたちがどんなに怒っても泣き叫んでも、さまざまな複
障害分野
利用者のニーズに
合わせた支援を
子ども支援コース3年 福山由里恵

私は、社会福祉士の受験資格取得のため、障害福祉の地域拠点である地域活動ホームで25日間の実習を行いました。実習では、相談支援を利用している利用者との面談に同席したり、地域の施設との合同の会議に参加したり、パンやクッキー、雑貨等も作る日中活動を利用して、方達と関わったりと、さまざまな現場を体験しました。

面談に同席させていただいた時には、利用者が今、何に困っているのかについて、会話の中から読み取るよう努めました。傾聴することで利用者が何を今

雑な気持ちを受け止めてくれる信頼できる職員が存在があることが安心につながるのだということも分かりました。子どもたちが自分の気持ちを大切にしているのだと感ぜられるように日々のコミュニケーションを大切にしていることだけでなく、子どもたちが感情を表に出すことができるのは、ここは安全で安心できる場所であると知っているからだ、ということを知りました。

皆さまとの会話や子どもたちとの触れ合いを通して感じました。職員同士の暖かなやりとりは、子どもたちの生活の不安に繋がりにかからないということも学び、職員同士よく話し合い、連携し合うことが大切なのだ学びました。

子どもたちは生活する場所やしたいのか、その方のニーズに合わせた支援とは何なのか、どのような機関でどのような支援に繋がれば利用者もっと生活しやすくなるのかを考えるようになりました。

地域の他機関との会議の中では、どの機関がどのような時に、どのような支援をしているのかということを少しずつ理解し、自治体独自の制度についても沢山知ることができました。この自治体は私が住んでいる市でもあったので、自分の市の福祉制度を理解することで、友達や家族にも説明ができるようになってきたのではないかと思います。

日中活動での利用者との関わりでも、言葉でのコミュニケーションを取る事が難しい方もいたため、最初はどのように関わ

担当職員が変わるといった環境の変化もある中で、職員も試行錯誤しながら、時には子どもたちの複雑な気持ちに対して悩みながらも引き継がれてきた支援があり、子どもたち一人ひとりの人生を繋いでいくことが児童養護施設での支援者としての大きな働きなのだ学びました。今回の実習を通して、誰かの人生に触れるということの不安や怖さを改めて感じました。私にとって今回の実習は誰かのために私にできる何かがあった、という気持ちがより一層強くなる実習でもありました。

